

CONET 特別シンポジウム

暮らしやすいまちづくり

(1)

日 時 2003年9月6日(土)

場 所 千葉市・幕張メッセ

出演者(敬称略)

■司 会

半田真理子 財団法人都市緑化技術開発機構都市
緑化技術研究所長

■パネリスト

澁谷 禎子 日本看護連盟千葉支部長、前千葉県
看護協会会長

奥山 福子 千葉市地域婦人団体連絡協議会会長

高久田くに 水谷建設株式会社東日本支社総務部
総務課長佐野 正道 国土交通省総合政策局建設施工企画
課長

9月4日から3日間、幕張メッセで開かれた CONET 2003 (本号 56 ページ参照) で、「暮らしやすいまちづくり」をテーマに特別シンポジウムが開催されました。本号と次号でその概要をご紹介します。



半田 機械に囲まれたこの特設コーナーで「暮らしやすいまちづくり」をテーマに、「CONET 2003」特別シンポジウムを始めます。それでは最初に本日のシンポジウムの趣旨につきまして、佐野課長、よろしくお願いいたします。

佐野 今日は「CONET 2003」のこのような会場でシンポジウム、それも女性の方に囲まれて私1人だけ男性ですが、簡単に趣旨をご紹介します。皆さんご案内のとおり、この「CONET 2003」というのは「夢ある未来を拓く先進の建設技術」というテーマで今年開催されていますが、この会場を御覧いただいたらわかるように、国内はもちろん海外も含めて最新の建設機械あるいは施工技術が展示されています。

今日は土曜日ということもあり、建設業に携わっておられる方のお互いの情報交換ということだけではなく、広く一般の方にもたくさんおいでいた



ております。建設機械あるいは施工の技術というのは今、大変風当たりの強い、社会資本をつくるにあたっての基礎になるものですが、こういった最新の施工技術や建設機械を身近な形で御覧いただき、あるいは場合によっては建設機械の運転席にまで上っていただいて眺めていただき、道路、ダム等もろもろの社会資本を身近な形で感じていただければ、非常にありがたいと思っております。

そういう中でこのシンポジウムを開催させていただく主旨は、どちらかといえばこの世界は男性の世界と見られがちですけれども、やはり女性の目からも社会資本整備、特にこういった社会資本については、つくるだけではなくて有効に使っていただかなければいけないわけでございます。利用者の立場といったところから見ますと半分以上は女性の方でございますから、そういう視点からいろいろ貴重なご意見を賜りたいということで、このシンポジウムが企画されたものです。

テーマ1 暮らしやすいまちづくり

半田 ありがとうございます。それでは早速「テーマ1」に入ります。「暮らしやすいまちづくり」について、澁谷様いかがでしょうか。

澁谷 私は職業柄インフラを利用する観点で最も関心が高いことは、バリアフリーに関するところでございます。バリアフリー化されたインフラが整っていない我が国の中では、高齢者や体が不自由な方々の自立を抑制しているということを、まず指摘させていただきます。

といいますのも、以前私が看護の仕事に携わっておりましたころの患者さんが、九死に一生を得たという大病からようやく回復され、真剣にリハビリに励まれまして車いすで生活できるようになりました。ところが一歩外へ出ますと、歩道が狭く歩道と車道の区別がない、段差も多くあるなど、インフラがバリアフリーになっていないことから、周りも自立できると期待していた方が、ちょっと出かけるにしても介助が必要になることから、最近ではめっきり出不精になってしまいました。

これはほんの一例ですが、私たち医療にかかわる者として、苦しい治療をようやく終わってとても厳しいリハビリを経て、せっかく自立できる日常生活に戻られたのに、インフラが整っていないために自立した生活が送れないということは非常に残念なことです。

さて、今日は「暮らしやすいまちづくり」をテーマに私たち利用者の立場で率直な意見を聞いていただき、より使いやすい生活の場をつくっていただけるよう、国土交通省の政策に反映していただけるということです。体の不



自由な方々の障害の有無や程度は個人の属性であって、尊重されなければならないと切に思うところがあります。ぜひ道路をはじめ鉄道、空港、港湾などのインフラの整備を推進されている国土交通省には、すべての利用者が本当に使いやすいインフラ整備に真剣に取り組んでいただけるようお願いいたします。

半田 ありがとうございます。「暮らしやすいまちづくり」に向けて、奥山様いかがでしょうか。

奥山 今日はこんなにぎやかな建設機械に囲まれて、たくさんの方がお見えでいらっしゃいますが、私の場合はハードな機械に比べて、まちづくりという一つのソフトな面を特に取り上げてお話をさせていただきたいと思います。

私はまちづくりの活動をしている一市民というような立場で、お話をしたいと思っております。一般的にまちづくりといえますと、境界線を見つけることができずにあれもこれも幅広い事柄について課題に挑戦することを大きく括って、「まちづくりの活動」としてとらえるとも考えることも可能だと思います。私の場合は地域で草の根の活動を通して学習をしながら、生活をする住人の目線（そこに住んでいる人の目）で身近な住環境の問題に取り組む活動が、まちづくりの活動になったのだと思います。



私たちは教育文化、福祉、環境問題、それから消費者問題に取り組んでいます。いま一番大事なものは、その勉強を通して安心して暮らしやすい社会の実現を図ることを第一に考えたい、これはみんなの課題でもあります。「結局はだれが使うのか」ということを、

もう一度見直していただけたらいいなというように思っております。

さて、私たちが今回テーマとして考える「暮らしやすいまちづくり」という最初のテーマですが、かつて時代の社会のニーズに合わせてつくられたさまざまなインフラは、時を経るにしたがってそこに住む市民のニーズやその時代の社会や経済情勢、また結果として生まれた環境問題などの要因によって、必要性という点で変化が生じてまいります。以前は十分その機能を果たしたインフラの整備が、現在の人たちにとって必ずしも使いやすいものとは言えなくなっているのです。

公共の利便性という役割のあるインフラとは、当然その時代の社会的な要請を受けてつくられ、時代のニーズを敏感にとらえていくものだと思います。高齢社会を迎えて機能的に不便となるインフラなど、社会の構造の変化にしたがって刷新していくことが大切だと思います。

このようなことから考えていきますと、ポイントの一つとして「暮らしやすいインフラ、暮らしにくいインフラ」



と言いかえることができます。したがってソフトな面でのまちづくりが、これからの重要な要素になると考えられます。それにはやはりそこで生活する人がまちづくりに積極的に携われる環境、人と人とのソフトな面でのかかわりの場が不可欠であると思います。そして二つ目として、まちづくりは行政と市民の共同の作業であるということを申し上げたいと思います。

それから三つ目として、住環境は必然的に人がつくるということを再認識して、市民が個としてのエンパワメントを図ることが何よりも大事なことだと思います。そこに暮らす人も含めて、町の雰囲気を楽しめることができ、この感性を育てる歴史的な背景が存在する町、言いかえますと成熟した大人の町が次の世代に伝わっていくことは、インフラの整備にも基本的な選択肢として影響を与えていくものと考えています。

本日も来場の方たちは建設に携わっている方が多いと存じますが、ご専門の視点から助言をしていただくことで、もっとすばらしいまちづくりができるのではないのでしょうか。このように人材の豊かな真の市民参加が問われている現在、市民参加型のまちづくり、地域づくりを支えていく核となる人材がなくてはなりません。繰り返しになりますが、この人材を得た上で「私たちの住む町をどのような町にしたいのか」ということから、まず踏み出さなくてはなりません。

そして21世紀の構想をみんなが生きたものにしていく、そして必要なものと不用なものを選択する目を持つ大人がふえて、私たち市民が本当に必要な施設をしゅん別するということが、私たちの思いをする前に自分たちが成長して成熟した大人にならなければならない、そういうことを私は申し上げたいと思います。

昨今、教育の問題とか家庭でのしつけの問題が常に言われているのですけれども、よい大人になるための教育、それが日本の将来を担う子供たちにも必ず伝わるものと思

ます。一人一人の思いを語り合う中で社会に向かって再生していくこと、人の心や意識を呼び覚ましていくこと、そして社会の中で一つの転換点となるという面で共通項を見出せるのではないのでしょうか。「この点をよくしたい」という人間の気持ちはいつも変わらず存在するものだと思いますが、今のこの時代は、私としてはルネッサンスと呼ぶことができるのではないかと思います。

半田 ありがとうございます。それでは高久田様、よろしく申し上げます。

高久田 私は現在、水谷建設という建設会社の総務課を担当しておりますが、以前は重ダンプトラックといえます50トンクラス及び70トンクラス、90トンクラスというような大きな建設機械に乗務する仕事をしておりました。

ですから今日こうやって会場にいろいろな大きな建設機械がありますけれども、私が乗車したクラスよりももっと小さかったりするのですけれども、私は大型の建設機械に乗車しておりまして、なつかしいなど。10年ほど前はこういう機械を自分で操作して、ダム建設や空港の建設などに携わっておりました。

公共事業という言葉を目にしますと、昨今は公共事業自体が非常に悪者扱いをされているようでございます。何か間違った考え方といいますか、公共事業という言葉が間違ったイメージで皆さんに根づいてしまうのは、非常に悲しいというふうに思っております。私はやはりダムをつくってきた人間といたしまして、私たちが生きる上でもう絶対に不可欠なもの、大切なものが水であったり電力であったりするわけですけれども、そういうものをやはり基盤、基礎としてしっかりと確保ができたことの上によって、暮らしやすさというのを追求できるのではないかと考えております。



今年は世界的にも異常気象が原因でいろいろな災害が発生しております。日本でも大雨の影響で川のはらん、土砂災害、加えて宮城沖の大型の地震などもありまして、非常に災害が多く発生しております。その災害時に復旧作業を行うための設備というのは、ま

だまだ日本では後れているのではないかと考えております。日常生活の基盤に利便性というのを追求するのも確かに必要なことだと思いますけれども、もしものときの備えとでもいいますか、やはり縁の下の力持ち的な存在、それこそがまさに公共事業ではないかと考えております。

ですから今後は、例えば作業内容に適した重機（建設機械）といったものの開発ですとか、それから展示場などを見ていただくと技術の進歩や機械自体の進歩というのはすぐ進んでいると思うんですけれども、やっぱりそれは今

後の暮らしやすい社会、それからまちづくりには、なくてはならないものだというふうに実感します。

例えば先ほどバリアフリーの話もございましたけれども、町から段差が一つもなくなってしまったとしたら、やはり小さいお子さんの足の感覚や歩行の技術にも影響を及ぼしてしまったりもする、というふうなこともあるのではないかと。ですから、あらゆる立場の利用者が本当に使いやすく、多くの人々の役に立つものづくりというものを、計画する側と、実際に建設に携わる我々こういった建設機械を使ってくる側、それから使う側の相互理解を深めながら、今後は計画を進めていく必要があるのではないかと。その中において、暮らしやすいまちづくりというのが実現するのではないかと考えます。

半田 ありがとうございます。それではここで国土交通省の佐野課長から、行政としての取り組みなどをコメントしていただけますでしょうか。

佐野 今、3人の皆さんから大変重要なご指摘をいただいております。「暮らしやすいまちづくり」というのが今日のテーマですけれども、暮らしということを考えるにあたっては、暮らしを支えているのはやはり道路だとか、あるいは先ほどバリアフリーの話がありましたけれども駅だとか、もろもろの社会資本といったものが私どもの暮らしの基盤になっているんだということでございます。

それで基盤になっているからこそ、先ほど来、皆さん方からお話がありましたように、使う側に立ってそういったものを整備していかなければいけないと思います。利用者の立場に立って使いやすい社会資本整備をしていく、これはもう私どもは肝に銘じてやっていかなければいけないと思います。ただ単に「予算があるからつくればいいんだ」と、そんな考えでやっていったらとんでもない非難を浴びますし、昨今いろいろマスコミ等からも言われているむだ遣いの象徴になってしまうと思います。そういう意味で利用者の立場に立って、使いやすいことをいろいろ工夫していこうと思います。

ちなみに一つだけご紹介しておきますと、従来、例えば駅ですと鉄道の事業者と駅前広場、あるいは道路を管理しております地元の市町村とか県とか私どもがバラバラに整備していたのを、一緒になって整備をするというような工夫もやるようになりました。こういう厳しい中でも予算的には来年度も相当伸ばして、重点的に取り組もうと思っております。やはり利用者の方に整備ができていよう、千葉近辺でもまだまだ未整備な社会資本はたくさんあります。そういった必要などには整備をどんどん進める、こういう姿勢が非常に大事だろうと思う次第でございます。

(次号に続く)

(文責：国土交通省総合政策局建設施工企画課課長補佐・宮石晶史)